

新たな不登校が生じない取組（「未然防止」の取組）

不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

【取組1】（A中学校）

本区では子供たちが目的意識をもち、周囲の人々と協力し合いながら、他者の視点や意見を尊重していけるウェルビーイングの学習を重点とした地区の教育振興基本計画「教育ビジョン」を策定している。

A中学校はウェルビーイング重点校として、生徒自らが主体性をもって取り組める様々な活動を行っている。

○居場所づくり

居場所づくりの一つとして、学習成果発表会に向けて、生徒一人一人が目標を設定し、その目標に向けた具体的な行動に取り組めるように目標カードを活用した。教師は、生徒一人一人の目標カードを基にして、活動の支援を行った。

○きずなづくり

きずなづくりでは、目標カードを学習成果発表会までの約1か月の間、昇降口から体育館までの廊下に掲示することで、当日の来校者や他学年の生徒も様々な生徒のカードを見ることができるよう環境を整えた。

クラスメイトや同学年の生徒と目標を共有することによって、協働的な学びを促し、生徒が互いに認め合える場を確保することのできる取組となった。目標カードを見ながら、友達に声をかける姿が見られ、互いの学びを深めようとする様子が見られた。



【取組2】（B中学校）

ウェルビーイング教育特別推進校であるB中学校では、定期的に「よりよく生きるためにはどのような活動が必要なのか」について考える授業を行っている。校庭や講義室といったグループで活動を行える場所で、ワークシートを利用し「きまり」や「命の尊さ」について考える授業を行った。

ウェルビーイングの「協働的な学び」は、生徒指導の実践上の視点である「自己存在感の感受」や「共感的な人間関係の育成」に取り組む上で欠かせない視点である。

【取組3】（C中学校）

夏季休業期間を利用し、各学年の学年主任を対象に校内研修を行った。不登校対応巡回教員の役割をはじめ、校内別室の設置目的や活動内容について説明を行った。各学校で年度はじめに目的や活動内容を説明することが多いが、教職員が入れ替わり、新たに配置された教職員が目的や存在そのものを知らないということも少なくない。特に教職員の多い義務教育学校ではその傾向がある。定期的に活動内容や成果を発信することで周知を徹底していく必要がある。

多様な学びの場を確保する取組

（「早期支援」及び「長期化への対応」の取組）の推進

支援会議（C中学校）

月に1度、不登校傾向のある児童・生徒への支援の方向性を検討する「居場所づくり委員会」を開催している。校内別室だけではなく、VLPや教育支援センターなどの利用も検討することでより良い支援を行うことができる。参加者は管理職・生活指導主任・校内別室指導支援員・SC・不登校対応巡回教員である。

アウトリーチによる支援（D中学校）

不登校傾向のある生徒の家庭訪問に担任教員と共に不登校巡回教員も同行することで、つながりをもつことができた。

そのつながりを活用し、担任教員が不在の際には巡回教員が窓口となり対応している他、不登校生徒への家庭連絡を巡回教員が代わりに行っている。

校内別室における支援（D中学校）

D中学校の校内別室では、校内別室指導支援員がアリーナや校庭の使用状況を確認し、利用児童・生徒と外で運動することがある。この際に地域のボランティアの方に協力していただき、後日お礼の手紙を送るということもあった。また、不登校対応巡回教員を通して、E中学校の校内別室の利用生徒と手紙のやり取りをするという取組も行っている。



デジタル機器を活用した支援（E中学校）

一人1台端末を利用して、学習活動を行っている。具体的には一人1台端末の学習支援ツールで数学や英語といった教科の学習を行っている。また、他の生徒と異なる活動をしたいという際にはイヤホンをつけて一人1台端末を利用させることで、自習しやすい環境づくりも意識している。

関係機関との連携（E中学校）

E中学校は、区が運営する教育支援センター「マイスクール」を併設している。生徒の実態によっては、校内別室ではなく「マイスクール」を紹介することもある。併設しているという環境特性上、生徒の様子を担任教員が見学できるというメリットがある。

成果

校内別室指導支援員の交流会や校内研修を定期的に開催し、不登校生徒に関する支援を共有することができた。また、多くの不登校生徒を校内別室につなげ、支援を行った。

課題

不登校が生じない魅力ある学校づくりを進め、生徒の未然防止に取り組むと共に、不登校生徒への継続的に支援方法の充実が必要である。